

小中学生におけるキャリア意識形成のプロセスの質的検討

—学校内で行われている進路指導の取り組みから—

澤柿 温美 石津憲一郎

小中学生におけるキャリア意識形成のプロセスの質的検討

—学校内で行われている進路指導の取り組みから—

澤柿 温美¹ 石津憲一郎²

Qualitative Study on the Process to Build Career Awareness among
Primary and Junior High School Students.
—Based on the Practical Attempts for Career Guidance in Schools—

Atsumi SAWAGAKI, Kenichiro ISHIZU

キーワード：キャリア意識 役割経験 感謝 尊敬

Keywords : career awareness, role play experiences, gratitude, respect

I. 問題と目的

1. 研究の背景

学校教育へのキャリア教育導入の背景には、日本社会の産業構造や経済の大きな変化がある。個人の生き方や職業人としての資質・能力・高度な対人能力等が厳しく問われるようになった。“豊かな社会”への発展の過程においては、人々は生活の安定のために仕事中心の態度・価値観を共有することが容易であった。しかし、一度“豊かさ”が実現されてしまうと、仕事中心の態度・価値観は、広く共有された安定した社会基盤とはなり得ず、「働くことの価値観」を再考する必要に迫られているといえる（関・吉田・篠原・吉山・三角・三隅,1999）。また我が国のバブル経済の崩壊後、若年層においての未就業者や非正規雇用形態の増加、早期離職率の増加など、様々な社会的課題が示されている（中教審答申,1999）。下村（2009）は、高校生が進む進路にはいろいろな壁や溝があり、自分で自分の進路を切り開いていけるような力を何とか学校にいううちに身につけさせてあげなければいけないと述べている。本研究では、キャリア意識を「どのように生きていきたいのか自分の進む方向を指す羅針盤の役目をはたすもの」と定義する。その羅針盤は生涯を通して自分自身を支えてくれるものとなる。児童生徒が学校を巣立ち社会へ出ていくときに、自分らしく生き生きと活躍できる基盤となるキャリア意識とはどのような姿をしているのか、発達課題と照らし合わせて明確にすることには意義がある。

2. 現在実施されているキャリア教育の問題点

社会の変化と発達段階を見通したキャリア形成の問題点の一つは、現在行われている教育活動の一つ一つ

が、児童生徒のキャリア意識形成にどのような影響を与えているのかが明確にされていないことである。例えば「2分の1成人式を実施したか」「職場体験活動を何日間実施したか」といったアウトプット評価はこれまでなされたが、「職場体験を通して生徒たちにどのような変化がみられるのか」「生徒たちにどのような力が身についたのか」といったアウトカム評価は各学校に委ねられており、それについての調査や研究は見当たらない。また、学校活動全体で行われるもの全てがキャリア教育であると包括的な捉え方をされているが、自尊感情や自己決定といった、教育の中で醸成されることが期待されるものが、キャリア教育のどの活動を通して形成されているのか、整理されていないという問題もある。

小学生を対象としたキャリア教育の実践研究や先行研究を調査した村井（2012）は、「国内のキャリア教育は教科・領域、実践される学年に偏りが見られた」「キャリア発達の過程において児童がどのような姿を見せるのか、そのイメージを教師は抱きにくい実態が伺えた」と問題を指摘している。小学校におけるキャリア教育の一つに「2分の1成人式」を挙げることができる。この活動は、「9割の保護者が満足、7割の保護者が子どものためになった」と高い評価が得られている（ベネッセ教育情報サイト,2013）。「2分の1成人式」で実施されている具体的な内容は、「子どもの個別発表（夢や感謝の言葉）」が60.6%、「保護者が子どもにメッセージや手紙を送った」が39.2%、「合唱の披露」が34.4%、「小さい頃の写真披露」が21.1%、「式典や謝辞の披露」が21.1%、「成長記録やアルバムの作成」が19.6%、記念撮影14.8%、「タイムレターを書いた」が9.2%、「未来日記を書いた」が5.5%となっている。しかし、これらの活

¹ 上市町教育委員会 ² 富山大学人間発達科学部

動の何がキャリア意識形成に影響を与えているのかは明確にされていない。このことが、キャリア発達の過程において児童がどのような姿を見せるのかイメージを抱きにくく、キャリア教育が進みにくい一因となっている。

中学校段階におけるキャリア教育の先行研究では（建沼・白井, 2013）、教師によるキャリア発達の視点を踏まえた「生活ノート」へのコメントによって、自尊感情の下位概念「関係の中での自己」、「自己主張・自己決定」が高くなったと述べている。生徒の自尊感情を高める教師のコメントとして、「認める・ほめる・考えさせる・受容する／共感する・励ます／感想を伝える」の6項目がカテゴリ化された。また、吉田（1992）は、現在中学校で行われている「職場体験」の実施率は98%以上であり、この「職場体験」の普及は、1996年の中央教育審議会答申において「生きる力の育成が提言されたこと」と「総合的な学習の時間の新設」が背景にあると述べている。職業体験の歴史的変遷をみると、1953年に「中学校・高等学校職業指導の手引―実践編」から職業実習が廃止され、それ以後、経験を通して発見した自己の適性や興味の理解と伸長の側面が強調されるようになっていく（吉田, 2009）。中学校職場体験ガイド（文部科学省, 2009）では、職場体験を「生徒の進路意識の未成熟や勤労感、職業観の未発達が大きな問題となっている今日、生徒が実際的な知識や技術、技能に触れることを通して、学ぶことの意義を理解し主体的に進路を選択決定する態度や意志、意欲などを培うことのできる教育活動として重要な意味をもっている」と定義し、職業実習的な技術習得の側面よりも働くことへ向けての態度や意志・意欲などの喚起を期待する啓発的な教育効果を目的としている。このような中学校における職場体験を通じたキャリア教育の方向性は、“無就業者の若年者の自尊感情に配慮した効果的なキャリアガイダンスのあり方として、若年者の自尊感情に配慮した支援が必要である”（下村, 2009）という見解とも一致する。

下村（2009）は、いずれ労働市場に参入する義務教育段階の児童生徒に基本的な自尊感情が育っていなければ、適切な就職活動や就職後も適応的な職業生活を送ることが難しくなることが推測されると指摘している。そして、労働市場に参入後の自尊感情の高い若者は、卒業後のキャリアよりも学校生活の評価と関連が強く見られたと述べている。「好きな先生がいた」や「家でよく勉強をした」「友人が多かった」など適応的な学校生活を送ったと回答したもので自尊感情が高かった（下村, 2009）とあるように、学校教育の段階で社会の中で生きていく力を高める取り組みがなされることは重要である。

これらのことから、キャリア教育が行われる中で、様々な社会的能力の形成の重要性は明らかであることは明確であるものの、それらがどのようなプロセスで形成され、そのとき児童・生徒はどのような姿を見せるのかについて一定の見解を得ることには意義がある。

3. 本研究の目的

以上の問題を踏まえ、本研究では、キャリアを「自分の人生を考えていく上で、どのように生きていきたいのか心の軸を形成していく選択と行動の連続的なプロセス」と操作的に定義し、小学校で行われている「2分の1成人式」と中学校で行われている「14歳の挑戦」に焦点を当てて、それらの体験が子どもたちのキャリア意識にどのような影響を与え、またその意識がどのように育まれるのかを、グランデッドセオリー法による質的方法によって検討することを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査協力者

本人と保護者の同意を得られた中部地方のX県に住む小学4年生の児童10名（男子2名、女子8名）に対してと、中学2年生の生徒5名（男子3名、女子2名）を調査対象者として、半構造化面接を行った。児童・生徒の抽出は、研究の趣旨を踏まえた学校長や判断から、インタビュー調査に回答できると判断された者の中から、担任が抽出した。

2. データ収集

2016年2月～3月（小学生）と2016年7月～8月の夏期休業中（中学生）に行った。面接は、外部の音が比較的遮断され、また外部からは壁やドアで遮断されて、他の児童・生徒から視界に入りにくい静かな教室と会議室で行った。

小学生の主な質問項目は、①家での様子について②学校での様子について③「2分の1成人式」の感想④2分の1成人式の前後における自己変容の認識⑤今後、自分が大切にしたいと思っていること、の5つからなり、中学生の主な質問項目は、①「14歳の挑戦」の目標②目標達成のために努力したこと③「14歳の挑戦」でうれしかったこと・充実したこと、苦しかったこと・大変だったこと

④その出来事が今の自分に与えた影響の4つからなる。面接内容は、調査対象者の同意を得てICレコーダーに録音し、音声データから逐語録を作成した。小学校の面接時間は、一人当たり25分～35分で、延べ250分であった。中学生の面接時間は、一人当たり25分～30分で、延べ138分であった。

3. 倫理的配慮事項

対象者の負担になる点はないか、筆者の指導教員と検討を行い、インタビューガイドを作成した。面接にあたって、インタビューを依頼した学校の管理職と対象者、対象者の保護者に研究の主旨・個人情報の保護・録音の許可・インタビュー中止の権利について文書と口頭で説明をして同意を得た。インタビューの際には、本人に研究の主旨・個人情報の保護・録音の許可・インタビュー中止の権利を再度確認した。

4. 分析の方法

人間を対象にある“うごき”を説明する理論を生成する方法に適している修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified grounded theory approach:M-GTA)(木下, 2007)を用いて分析を行った。木下(2007)は、M-GTA は研究対象がプロセス的特性をもっている場合に適しており、特に人間を対象に、ある“うごき”を説明する理論を生成する方法であると述べている。本研究では、先行研究において分析が進んでいない小学生と中学生のキャリア意識の形成プロセスを、小・中学校で実践されている「2分の1成人式」と「14歳の挑戦（職業体験）」という時間的・空間的に規定された場面から明らかにすることを目的としている。従って、本研究の対象者の小中学生がどのようなプロセスを経ながらキャリア意識を形成していくのか、その“うごき”を捉えるのにM-GTAは適した分析方法である。

5. 理論生成のプロセス

小学校の分析テーマを「2分の1成人式を通して発達するキャリア意識形成のプロセス」、中学校のそれを「14歳の挑戦を通して発達するキャリア意識形成のプロセス」とし、データの関連箇所に着目し、分析ワークシートを立ち上げた。一人目の分析焦点者の全データから概念を生成したら、同じ方式で二人目以降のデータに移り、すでに生成されている概念は既成のワークシートに引き

続き記入し、新しい概念が生成されたらその都度ワークシートを立ち上げた。小学生の最終的な概念数は16であり、中学生のそれは22であった。分析の途中、概念や定義が思考を適確に言語化しているか、概念とデータ間をいったりきたりしながら、解釈の緻密化を図り、分析の収束化に向けて、概念間の比較を行い、関係のありそうな概念をまとめてサブカテゴリを生成、さらに抽象度を高めるためにサブカテゴリ同士の比較を行って、小学校、中学校とも5つのカテゴリを抽出し、3つのコアカテゴリを抽出した。構成単位相互の関係を深く解釈し、その“うごき”を説明できる結果図とストーリーラインを構築し、記述した。また、分析の信頼性を得るために、スーパーバイザーとして、指導を仰いでいる心理学の研究者に依頼し、同じように疑問点や問題点を指摘してもらい、概念の再定義化とカテゴリの分類を行った。

Ⅲ. 結果と考察

1. 小学生

分析の結果、16の概念と10のサブカテゴリ、5つのカテゴリを抽出し、最終的に3つのコアカテゴリを抽出した。概念は〈〉、サブカテゴリは《》、カテゴリは【】、コアカテゴリは□で示した。それらを Table1 に示した。また、結果図を Fig1 に示した。

Table1. 「小学生のキャリア意識形成プロセス」 コアカテゴリ・カテゴリ・サブカテゴリ・概念 / 定義 / 具体例 一覧

コア カテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	概念	定義	具体例
【危機を体験】	【つながりの中でのアンビバレントな体験ともがき】	《負の自己》	自分の気持ちを伝えられない 04	自分のなかでもややもやする気持ちをもちながらも言えない	* ずっと自分の言いたいことを親に言えなくて、…怒られるかなって怖くて、ミスしたら、ずっとお父さんの顔ばかり伺って、すごい自分のプレーできなかったけど、… (A)
			自分の弱い部分を認知する 03	これまでの自分を振り返って自分の弱いところを語る	* 3年生までは、けんかばかりしとったけど、4年生になってけんかはしなくなった。3年生まではいやなことばかりしとったから、友達に。(J)
		《負の環境》	クラスの中のネガティブな体験 14	自分が「こうしたい」という気持ちがあっても、学級の雰囲気や構成員によってできないことがある	* 3年X組の時は、いろいろなことと言われるからこわくて何もせんかった。3年生のとき発表もしたけど、こわくて間違えそうなやつは発表せんかった。何か言われたり文句言われたりするから、友達から (E)
【感情の体験から生まれた他者視点と主体性】	【感謝の気持ちから生まれる他者視点】	《家族とのきずな》	家族から受信するメッセージ 06	辛い状況のときに、家族が本人を見放さずに励まし支える家族から自分が必要とされていることを実感する	* 他の選手にどんどん抜かされていってしまっているけれども、お母さんは私のことをずっと応援してくれて、お父さんとも今日の試合の振り返りを言ってくれたりして・・・「今から今から強くなるからまだ安心してね」って言われるのが一番ほっとする (A) * 家の人から聞いたことは、赤ちゃんの頃の話聞いて、上全部男だったんで、娘が産まれて嬉しかったって言っていました。(それ聞いてどう思った?) 嬉しかった。(初めて聞いたことだった?) うん。(G)
			兄弟との関係 02	兄弟の存在が日常の一部であり、本人に影響を与えている	* 平日は帰ったらまずは、弟と一緒に宿題をして、その後は友達と遊んだり弟と一緒に遊んだりしています・・・ (H)
		《他者の恩恵を享受する自分に気づく》	感謝の気持ち 07	親に対して感謝の気持ちを抱く	* お母さんは仕事と家事を両立して頑張ってるので、少しでも休んでもらいたいし (G) * (お父さん、おじいちゃん) ずっとノックとか出してくれたり、お母さんは送り迎えとか、栄養のある食事とかちゃんと考えてくれたり、・・・ (A)

〔感情の体験から生まれた他者視点と主体性〕	【感謝の気持ちから生まれる他者視点】 【連帯感から生まれる主体性】	《他者の恩恵を享受する自分に気づく》 《心を開ける友人》 《役割の経験と仲間意識の高まり》	感謝に対する返報性 09	家族の恩恵によって支えられていること認識し、恩返ししたいと思う	*「2分の1成人式」の日からお手伝いをしています。今まで育ててくれたから、これからは恩返ししようと思って。4年生になって（小さい頃のは）大変なことをさせていた話を聞いたら、これからは大変なことをさせようががんばろうと思った（J）
			特別な友達との存在 11	親友と思っている特別な友達がいる	*友達と仲良くてずっと遊んでいます。休み時間が1番好き。大縄したり、2人跳びしたり、ひっかかったら大笑いして遊んでいる（A） *いろいろな人と触れ合えて、友達なったりすることもあるし、いい勝負だったって思って次から頑張ろうって思えるときもある。・・・それからずっと、友達で仲良くしている人がいます。辛い部分もあるけど、楽しいかな（I）
			役割の経験 17	責任のある役割を経験し、満足感を獲得している。	*私は実行委員で、台詞も全部考えた。2分の1成人式ちゃんとできるか心配だったけど、みんなを信じて臨んだ。男の子が全然台詞覚えてくれなくて、ずっと紙見てて、先生にも注意されているのに、全然練習する気にならなくて、本当に心配だった。（A）
			仲間意識の高まり 12	みんなで一緒にやり遂げた経験が自分を高めてくれる	*4年生になって学級目標が「チェンジ」だからみんなで変わろうと思って、ここまでできたと思う。みんなで協力したり、真剣に授業うけたりしとる（J） *みんなが協力してやることは初めてだったかなーって・・・。みんな成功したって思った。みんな一団となって、喜べ合えたりした（I） *最初は、（2分の1成人式で）何をすればいいか分からなかったけど、ちょっとずつ準備をしていくといろんなことができた。学習参観の時にありがとうという気持ちが思い出せてきました。式の終わりに、泣きそうになったけど泣かなかった。場の空気とか、本番と練習はすごく違うと思って、（ありがとうという）気持ちが出て、自分ができるとをやりたと思った・・・（E）
〔物事に取り組む力〕	【希望を抱く】	《憧れをもつ》 《目標をもつ》 《決断する》	憧れる人の存在 13	憧れる人を見つける	*震災があったときにTVでレスキュー隊の人を見て、すごいなと思った。（G） *バトミントンでいうと山口茜ちゃんみたいな感じ。高校生だけどオリンピック出とる。・・・監督にテレビ見ろよって言われて、動きとかすごいなと思って、興味もった。（I）
			心が惹かれる 02	自分の好きなことや得意なことを語る	*発表とか頑張っています。算数とか道徳とか、自分で考えられるからそういうの好き（E） *身体動かすような仕事につきたいと思っている。身体を動かすことは楽しいので。（G）
			なりたい自分のイメージを描く 01	自分が続けていることを起点にして未来を見つめ、「こんな自分になりたい」とイメージする	*バトミントン一筋で家族もいつもお世話になっって、ここまでこれたのは家族のおかげだったから、10年間ありがとうという気持ちと、これからはもっと強くなっていく気持ち（A） *調理師免許取りたい。お母さんもおばあちゃんも免許もってる（C）
			今頑張ることの心構え 15	自分のためにがんばる目標をもつ	*（宿題は大変だけれども）自分のために勉強せんにゃいけんから、がんばっています。（H） *今サッカーやっとなるから、サッカー続けとるからプロなって優勝したところをお母さんにみせたい（j）
	【自分で行動を選択する】	《決断する》	自分の中の本当の気持ちを伝える 05	これまで怖くて自分の気持ちを親や友達に対して言えなかったが、「2分の1成人式」をきっかけに、心の中にあるもやもやした気持ちを伝えようと決断する	*これまではずっと甘えて指導（してもらってきたけど）、自分で進んで考えたりできるようになったらいいなと思いました。ずっと自分の考えを親に言えなくて、これからは自分の意見も言って、親子で強くなっていったらって・・・初めて自分の意見を言えました。（A） *司会とか、ナレーターとか自分から進んでやりました。いろいろなことを自分からやりたいて気持ちで。4年生になってクラスがきちんとしてきたから、自分でやりたいて気持ちが（もっと強くなった）（E）

〔物事に 取り組 む力〕	【自分で 行動を 選択する】	『主体的に挑 戦 しようとする』	うれしさ・充実感 が原動力 10	うれしいと思ったり 充実感を感じたりで きる心の動く体験が 次の行動を起こす	* (家でするお手伝いは) 料理。楽しいからする。(C) * (太鼓の楽しいところは) 2人で太鼓一つを回っ て、順番にたたいていって、最後一斉にドンと叩くこ ろが好き。太鼓 (の練習時間中) に休み時間あるけ ど、楽しいから休み時間もみんな一生懸命やってい て、……。 (F)
--------------------	----------------------	------------------------	---------------------	---	--

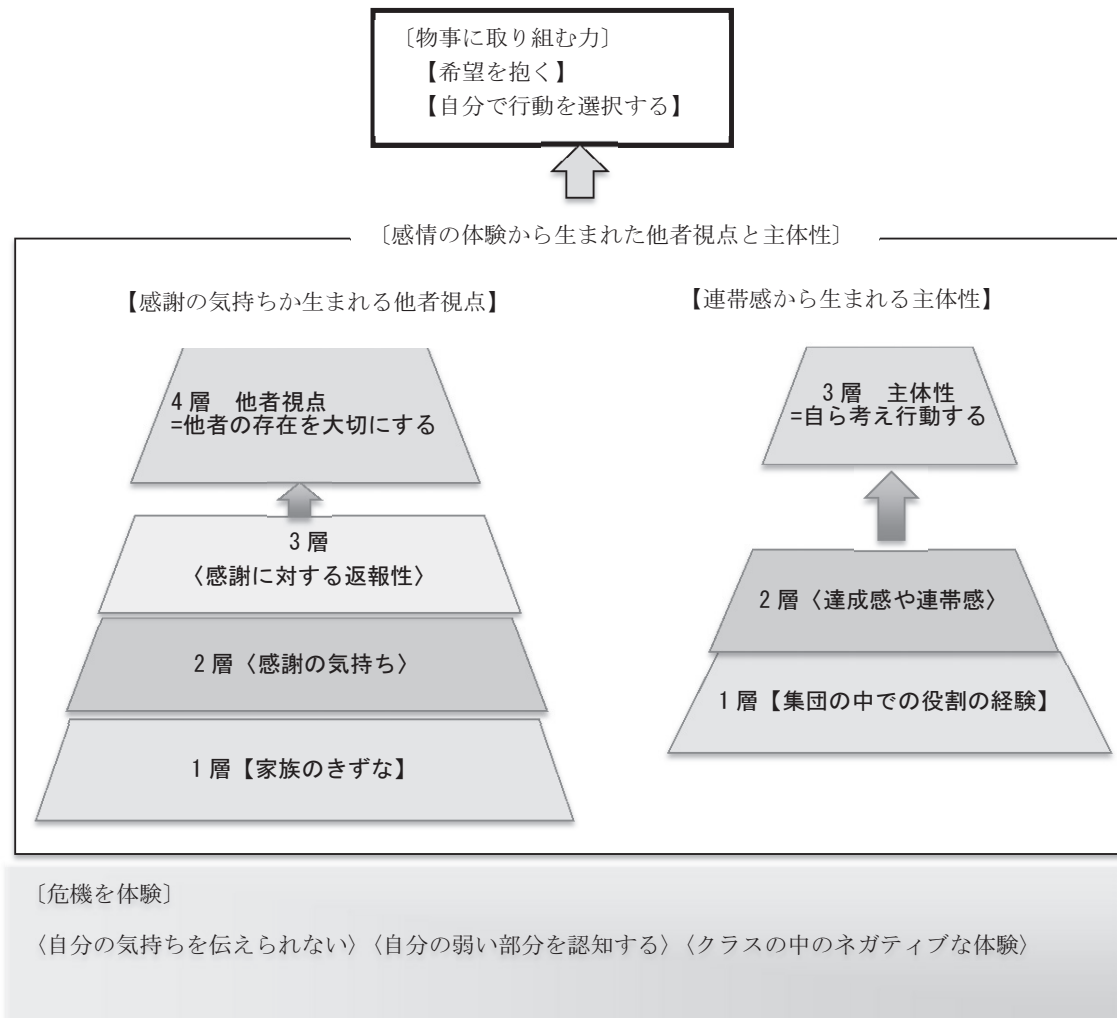


Fig1. 小学生のキャリア意識形成のプロセス「感情体験システム」

(1) コアカテゴリ「危機を体験」

4年生にとって、家族や友達は自分の安全欲求や承認欲求を満たしてくれる存在でもあり、葛藤を生じさせる原因でもあることが語られた。例えば、一方的に言う親に対する“ずっと自分の言いたいことをいえなかった・・・ミスしたらお父さんの顔色ばかりうかがって、自分のプレーができなかった・・・”の語りは、親との間に生じた価値観のずれ、“3年生のときも自分からいろいろなことをやりたいって思っていたが、周りの友達からいろいろなことを言われるのが恐くて何もなかった”の語りは抑圧的な気持ちの増幅、“3年生まではけんかばかりしていたし、友達にいやなことばかりしていた”の語りは自分で自分を抑制できないことをメタ

認知できないなど、個々に危機を体験していることを物語っていた。価値観のずれによって葛藤を生じていた児童は、後に“自分の苦手な選手の弱点を攻めれば自分にも勝つチャンスがある”というように、アサーション的な方法で危機を乗り越えた内容が語られた。危機や葛藤の体験は発達機会と捉えることができ、危機や葛藤を調整していく能力が個人のキャリア意識となっていくものであることが分かった。

(2) コアカテゴリ「感情の体験から生まれた他者視点と主体性」

コアカテゴリ「感情の体験から生まれた他者視点と主体性」は、カテゴリ【感謝の気持ちから生まれる他者視点】とカテゴリ【連帯感から生まれる主体性】から成り

立っている。感謝の気持ちから生まれる他者視点は、感謝という感情体験が、まずは自分にとってかけがえのない親や家族の立場に立って物事を考える「他者視点」を獲得させ、やがて広く相手のことを大切にしようとする他者理解へ至ると考えるモデルである。

小学生は、家族と友達という2つのリソースから受容されている実感を獲得し、「感謝・感謝に対する返報性」、「連帯感」という感情を生起させていた。子どもたちは、家族との間に情緒的なつながりを感じながら日常を過ごしている過程で、「2分の1成人式」というフォーマルなイベントの経験が、家族に対する〈感謝の気持ち〉を生成させていた。“娘が産まれて嬉しかった”や“赤ちゃんの頃によく怪我をして心配をかけていた”のようなエピソードを家族から聞いたことで、自分は家族から恩恵を受けて大きくなったのだと自覚が促され、家族に対してお返しをする返報行動をとっていた。何かをしてもらったら相手にも自分が受けた分お返しをしようとする互惠規範の表れであり、社会生活を基盤としている人間にとっては重要な規範である（泉井・中澤，2010）。このことは、自分中心で成り立っていた世界が【家族とのきずな】を通して他者の視点を獲得していくきっかけになったと言える。この3層構造の上には他者の存在を大切にす他者理解に到達する4層構造を成すと考える。

カテゴリ【連帯感から生まれる主体性】は、連帯感や達成感の感情体験が、内発的動機に基づいた主体性を獲得させると考えるモデルである。連帯感や達成感の体験に有効に働いたのは、役割の経験であった。役割は、仲間との交流の中で経験されるため、どんな友人観がクラスに育っているかを把握しておくことは重要である。小学生の語りにあった「ずっと遊んでいる」や「友達が分からないときは助けようと思っている、言い方も怒らずに言おうと気を付けている」や「いろんな友達との交流が次からがんばろうって気持ちにさせてくれる」などは、ゴットマン&パーカーの友達をもつことの機能の仲間付き合いや刺激、物理的サポート、自我のサポート、親密さ・愛情の機能とも一致していた。このような機能をもつ仲間との間で実施された「2分の1」成人式での役割の遂行は、“最初は2分の1成人式で何をしたらよいか分からなかったけど、ちょっとずつ（みんなと）やっていったらいろいろなことができて、学習参観のときにありがとうという気持ちが思い出してきた・・・式の終わりの方で泣きそうになったけど泣かなかった。場の空気とか、本番と練習はすごく違うと思ったら、ありがとうという気持ちが出て、これから自分ができることをやりたいと思った・・・”や“みんなが協力してやることは初めてだったかなって・・・みんなで協力できたりみんながアドバイスし合ったりした・・・”の語りにあるように、自分もがんばっているが、がんばっている友達にも共感したのである。集団の連帯感の高まりは、コミュニケーションを活発にし、より内発的動機に基づいた努

力を促進する。つまり、目標に向かって自分で考え行動しようとする主体性が育まれていることを意味する。集団の中での役割の遂行は、達成感や連帯感という感情を生起させ、それが主体性に到達する3層構造を成すと考える。

（3）コアカテゴリ【物事に取り組む力】

コアカテゴリ【感情の体験から生まれた他者視点と主体性】のプロセスにおける連帯感を伴った成功体験は、“学級目標が「チェンジ」だからみんなで変わろうと思って、みんなでここまで来たんだと思う。みんなで協力したり、真剣に授業うけたりしとる”の語りあるように、「こうすればうまくいく」という新しいスキーマを獲得させ、「他の選手にどんどん抜かされていってしまっても、私のことをお母さんはずっとずっと応援してくれてお父さんも試合の振り返りを言ってくれたりして」の語りにあるように、他者からの恩恵を享受して生きている自分の認知は「家族や社会のためにがんばる」という利他的な行動のスキーマを獲得させていくと考える。感情を伴った体験が、目の前の困難にも耐え、自分の目標に向かって努力しようとする【物事に取り組む力】へと結びついていくと考える。

（4）ストーリーライン・小学生

家族や友達は自分の安全欲求や承認欲求をみたしてくれる存在でもある反面、〈自分の気持ちを伝えられない〉ことや〈クラスのネガティブな体験〉を所有する〔危機を体験〕の要因ともなっていた。〔感謝の気持ちから生まれる他者視点〕は、「2分の1成人式」の活動中、〈家族から受信するメッセージ〉が、小学生に自分のために時間と労力をかけてくれる親に対する「感謝」の気持ちを認識させる役目を果たしていた。そして、感謝の気持ちから派生した《他者の恩恵を享受する自分に気づく》ことが、〈感謝に対する返報性〉の行動を生起させる。この一連のプロセスは、親をはじめとしてさらには、広く他者の立場に立って考え、他者を思いやる他者の視点を獲得させていくと考える。もう一つの〔連帯感から生まれた主体性〕は、〈特別な友達〉の意識が芽生えてきている仲間同士の中で、〈役割の経験〉が〈仲間意識の高まり〉を生じさせ、コミュニケーションを活発にさせ、より内発的動機に基づいた努力を促進させると考える。〔感情の体験から生まれた他者視点と主体性〕は、自分の未来に【希望を抱く】要因となり、【自分で行動を選択する】〔物事に取り組む力〕へとつながるという仮説を生成することができた。

2. 中学生

分析の結果、22の概念と9のサブカテゴリ、5つのカテゴリを抽出し、最終的に3つのコアカテゴリを抽出した。概念は〈〉、サブカテゴリは《》，カテゴリは【】、コアカテゴリは□で示した。それらをTable2に示した。また、結果図をFig1に示した。

Table2. 「中学生のキャリア意識形成プロセス」 コアカテゴリ・カテゴリ・サブカテゴリ・概念／定義／具体例 一覧

コア カテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ	概念名	定義	具体例
〔統合されていく自己〕	【現実自己と理想自己の認識】	《自分の欠点を 《なりたい自己》	自分の苦手なこと 01	自分について自分で定義する	* 自分自身初めて会う人に積極的になれんというか、話しぶりかなみたいなことを思ったりするんで (A) * 発表するときとか、小学生のときなんですけど、集会のときに体育館のステージに立って発表するときによく頭が真っ白になってしまってそういうことがあったので (E)
			笑顔が大事 22	笑顔というものに中学生は価値をおいていることが分かる	* どのお店へ行っても店員さんは笑顔で接客をされているので、どうして笑顔でできるのかという目標をたてました (C) * 自分はよく人前に立つと緊張して頭が真っ白になるんですよ。でも、郵便局へ行ったときに郵便局の人は初対面の人に対して笑顔で明るく接していたので、それはどうしてできるのかなとちょっと疑問に思ったので郵便局にしました (D)
			コミュニケーション能力を身に付けたい 24	コミュニケーション能力というものに中学生は価値をおいていることが分かる	* 中学校に来て小さい子と関わるのが少なく、コミュニケーション能力を高めようと思って児童館にしました (B) * 初めて会うお客さんに好印象を与えられるにはどうしたらいいかを知りたい。自分自身初めて会う人に積極的になれんというか、話しぶりかなみたいなことを思ったりするんで (A)
〔様々な感情を体験する〕	【自分を振り返る契機】	《葛藤を経験する》	仕事の大変さに直面 18	職業体験をして大変だと感じたことを語る	* はんこを普段は押さないからことだから楽しもうと考えたり、何時間も続けるのは根性いることだからひたすらがんばりました (E) * 7月の初旬で、草むしりは本当に暑くてぜったいにやりたくないなあって思ったんですけどがんばってやりました (C)
			ギャップを感じる 12	想像していた仕事の内容と実際に事業所へ行って見たりやったりした現実との間に隔たりを感じる	* 小学校のときに児童館へ行って遊んでいたけれど、私たちが来ない午前中におられる仕事がたくさんあってちょっと違いました。 (B) * 外国人の方が来られたら、どういう対応をするのかなと思ってすごい気になっていました。身振りや手振り、簡単な言葉使いで (対応) されていたので、そうするんだって分かって新鮮な感じがしました (E) * 受付の仕事が少なかったんで、本当だったらもう少しお客さんとかと接することができればよかったんですけど、すぐに来た身なんで初日に草むしりとか、掃除とかでがんばろうと思いました (C)
			失敗 26	緊張が緩んで大人から注意をされた経験	* ちょっと慣れて、それで2日目にしゃべってって・・働かせてもらってそんなにそんなんじゃだめだなんて思った。最初はとにかく迷惑にならんようにがんばろうって気持ちで、そこで変わりました (A)
〔様々な感情を体験する〕	【大人を尊敬する】	《大人のまねからの学び》	大人をまねる 02	その状況に適応するために、事業所にいる大人の様子をまねる	* なるべく自分が接客とかもやらせてもらったときに、教えてくれる人の話を聞いたり細かい所まで見て真似しようと心がけました。(E) * 次はもうちょっと大きい声だしてがんばろうとやって、自分の中で目標とかを決めたり、お店の人の真似をしてみたりしました (D)
			行為の意味に気づく 16	よく見たり真似たりしている間に、事業所の人の働きかたや工夫のようなものに会っている	* 高齢者の方や外国人の方には、手でここに書くんだよとか簡単な言葉で言ったり、何回も同じことを言っていて分かりやすくなりたてられていると分かった (E) * (笑顔で接客するのは) 自分たちから笑顔で接するとお客さんも笑顔になって自分が嬉しくなった。自分に返ってくるっていうことが実感できた (D)
			プロフェッショナルな面を目にする 20	実際に中に入って仕事をしてみたら、見ただけでは分からなかったことが実感できる。	* その施設を使っていただくお客様に気持ちよく使ってもらうために会館準備をしておられた。仕事がすごく速くて、ぼくたちでやるよりも2倍3倍丁寧だったので、長いマットをまいたり、モップでトレーニング室を拭いたりするのも速かった (C) * 慣れていることもあると思うんですけど、道具の特色と言うか、いかにその道具を生かして速くきれいにできるか大切。重たくて、押したら自分も反り返るような道具を普通に使ってやるとるんで (A)

【様々な感情を体験する】	【大人を尊敬する】	《大人のすごさを実感する》	大人の思いやりの心 にふれる 15	お客さんに対して丁寧な気持ちで接している	*すごいなと、尊敬しました。郵便局は、保険とかお金のこととか、郵便物の受け取りは一つ一ついろんな仕事がある中で、お客様一人一人を大切にしているってうか、丁寧に笑顔で接しておられたのすごいなって (E)
			役割の多さ 27	大人は一人でたくさんの役割をこなしながら働いている	*幼児さんがこれらたら一緒に遊んだり、草むしりや花の水やりなど、いろんなことをしておられました。・・・(私は)草むしりが大変でした。暑い中ずっと草むしってて、なかなか抜けなくて大変でした。(お母さんに大変だったことを話すと)そういう自分が気付かない仕事をしている人がおって、いつもがんばっておられるんだからがんばられて、(それ聴いて)その通りだなんて (思った) (B)
【やる気を生むものと支えるもの】	【やる気を生むもの】	《やる気を生むもの》	楽しい気持ち 17	事業所で実際に仕事をするを通して、楽しい気持ちを感じ、やる気に結びついている	*こういう体験はできないし、レジをおすとかおつりを出すとかやってみたかった。だから楽しかった (E) * 5 日間終わってやりがいを感じられて、もっと良かったなって思いました。みんな5日間早く感じてて、学校で勉強するよりも楽しいって感じる人が多かった (B)
			感謝と励ましの言葉 08	他者からありがとうなどの声をかけてもらったことが効力感を生じさせ、向上心や意欲へとつながっている	*充実したことは、給油し終わった後にありがととかがんばってねと声をかけられたこと (A) *お客様と接して、ありがとって言葉をかけられてそれが楽しさにつながっていると思いました (E) *お花を包んでお客さんに渡す時に笑顔で「ありがと」って言ってもらえたり、笑顔で「がんばって」って言ってもらえたりしたので、(自分がうれしくなった) (D)
			結果が見える 19	自分のやったことの結果が実感できたことが、次の行動へのやる気に結びつく	*学校では事務的なことがあるんですが、事業所では肉体的な実際にやったら表れるってことを学びました (C) *農業(体験)をやっていた友達がいって、暑かったけど、商売とか実際に野菜の手入れをして結果につながったのでよかったと言っていました (C)
		《やる気を支えるもの》	サポートがあるからできる 09	事業所の大人のサポートがあったからできた	* (お母さんの車のタイヤの交換は) やりたくはない、タイヤが重すぎて持ち上げるのが精一杯で、(できたのは) なんか、アドバイスしてくれたり、補助をしてくださったおかげかな (A)
			悩みを相談する人の存在 14	葛藤の中にも、その時の自分の感情に向き合っている	* * そういう自分が気付かない仕事をしている人がいて、いつもがんばっておられるんだからがんばられて (B) * 家の人 (お母さん) には、暑いとかけっこう愚痴とか言っていました。がんばれとか、結構声をかけてくれました (C)
			責任を果たす 04	一人でたくさんのことをこなす大人の姿から責任を果たすことに価値をおく	* アドバイスはもらうんですけど、極力一人でできるように (A) * 積極的に働きかけることや一人でこなすことを心がけている。給食の皿とか重たいけど一人で、二人でやったら効率いいかもしれないけど、ぼく一人でやってる (A)
【強みとなる価値観を形成】	【自分のものさしをもつ】	《他者との親和的関係の重視》	他者視点に立つ 11	相手の立場にたって考えることができる	* (これから大切にしたいと思うことは) 自分のことだけを考えるんじゃなくて、相手の気持ちも考えて、いろんなことを言うことと、自分のことだけにいっぱいにならずに、周りのことに目を向けて困っている人は助けようと思うこと。 (B)
			他者との信頼関係を築く 21	他者との相互関係の中で信頼関係を築くことが大切であると考え	* 人に言われて動くことが多いので自分で周りを見て行動することを身につけていきたいと思います。 (B) * 学校では班長をやっているんですが、信頼がないとだれもついてきたくないし、フォロアーもしたくないので、信頼は必要だと思いました。スポーツ選手だったら松井秀喜みたいな人・・・人に怒らないとかそういう面 (E)
			自分の限界を広げる 06	自分の枠組みのようなものを自ら広げる行動をする	* これを通して、学校生活でも時間をしっかりと守ろうとする気持ちが出てきて、一生懸命に部活とかにも向かうようになりました (D) * やっぱ、なんかつらいことがあってももうちょっとがんばろうって思えるようになりました (D)

〔強みとなる価値観を形成〕

【自分のものさしをもつ】

《自己理解の拡大》

仕事に対するイメージが広がる 13

今までもっていた仕事に対するイメージの枠組みが広がっている

*自分が生きるためにお金をかせぐためだけのもので、生きていくためには（お金が必要だから）どうしてもしなければならないことというイメージだったんですが、終わったあとはやっていて楽しいっていうことも（仕事には）あるって（いうように）考えが変わりました（E）

暫定的な自己理解 25

自分になりたい自分になるにはまだ足りない部分もあるが、今はこんな自分でもいいと受容する

*立っとなる作業が多くて体力が必要かなといかに速く行動できるかとかそういう自分に足りない部分が分かったです。足りない部分はだめだなと感じました。（いろんなことが自分に出きるんじゃないかなって思えるようになったってこと？）足りない部分が分かった（A）

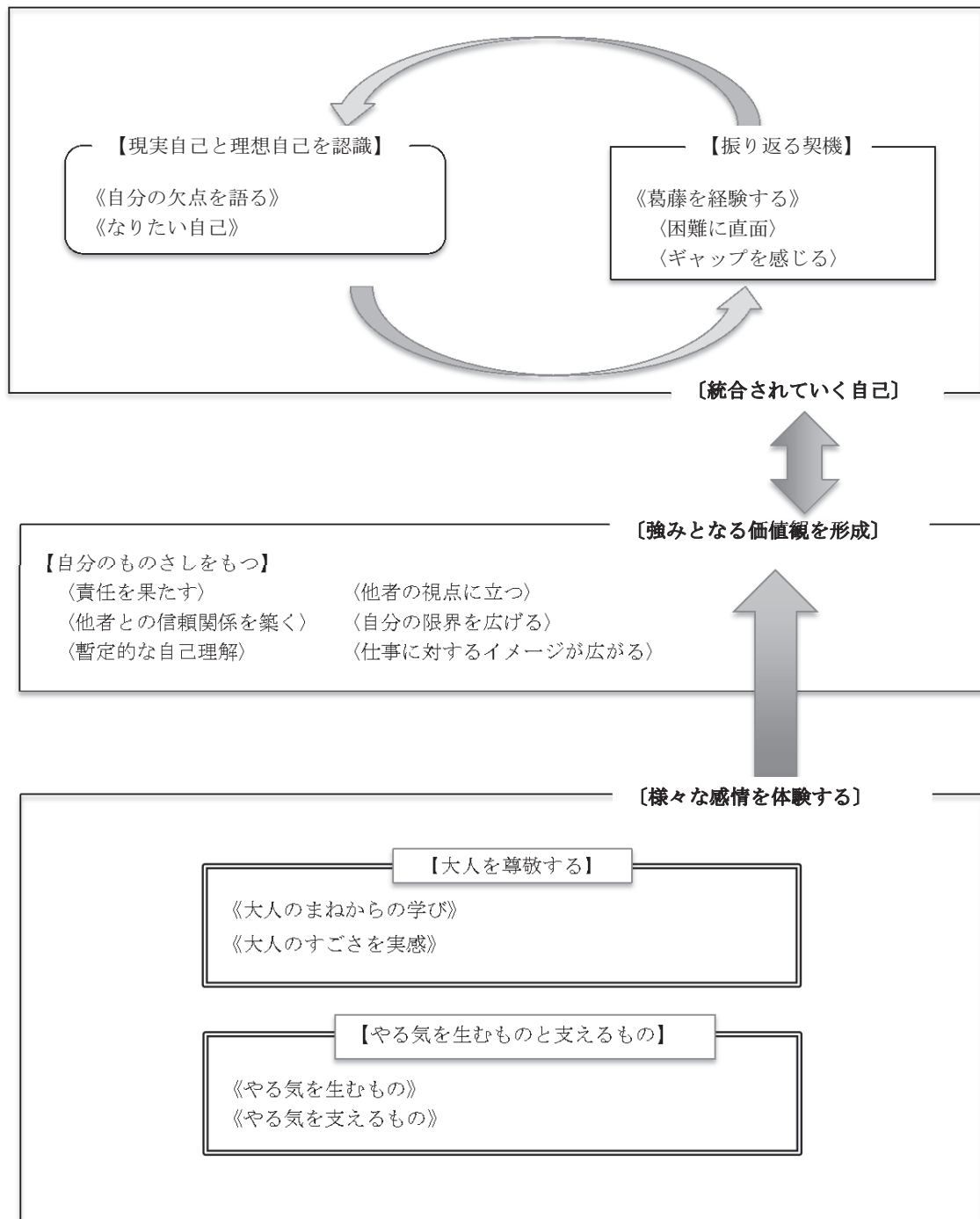


Fig2. 「中学生のキャリア意識形成」カテゴリ相関図

（1）コアカテゴリ〔強みとなる価値観を形成〕

本研究で抽出された〔強みとなる価値観〕は、中学生が学校や家庭というどちらかといえば閉ざされた世界から、いろいろな世代（お年寄りから幼児）との交流や外国籍の人との交流、サービスを提供する役割の経験など、より開かれた世界に身を投じて自分を見つめたことで、視点が広がり〈責任を果たす〉〈他者の視点に立つ〉〈他者との信頼関係を築く〉などの他者を意識した〔強みとなる価値観〕が構築されていた。また、うまくできた自分と足りないところのある自分、足りないところがあっても何とかなる自分のように【自己理解の拡大】を行っていた。速見（2016）は、思春期になっても粘り強く前向きに生きていくためには、自分の長所と共に自分の弱みや限界をある程度把握していることが大切であり、これは、親が原因を決めつけることでも無責任なことを言って気を楽にさせることでもなく、本人になぜ失敗したのかを考えさせるように仕向けることが必要であると述べている。キャリア教育では、なぜ失敗したのかを考えさせるように仕向け、本人が自分の資質や態度に向かい合い、考える習慣をつかさねるような関わりと、悩みを抱えて物事に向き合っていくことを支える情緒的サポートが中学生にとって不可欠である。

（2）コアカテゴリ〔様々な感情を体験する〕

コアカテゴリ〔強みとなる価値観〕を形成するプロセスに、コアカテゴリ〔様々な感情体験をする〕が影響を与えていた。〔様々な感情を体験する〕とは、新しい経験に驚くや大人に対する尊敬の気持ちをもつ、効力感をもつ、やる気が高まるなどである。中学生が事業所で働くときは、まず〈大人をまねる〉行動を取って適応しようとしていた。〈大人をまねる〉という行動を繰り返すうちに、外国人のお客さんが来ても、身振りや簡単な言葉のやりとりでサービスを受けることができるようにしていることなど、大人がなぜそのようにしているのか〈行為の意味に気づく〉ようになっていった。一方で、〈プロフェッショナルな面を目にする〉〈役割の多さ〉〈大人の思いやりの心に触れる〉という経験から、これまで気づけなかった《大人のすごさを実感》していた。“5日間が早く感じて・・・”のように〈楽しい感情〉は時間の経過を忘れるほど人を没頭させるものがあり、“暑かったけど、商売とか実際に野菜の手入れをして、結果につながったのでよかった”のように、〈結果が見える〉ことも暑いというストレスをはねのけ、自分のやっていることに効力感を感じることにつながっていた。《やる気を支える》のお客さんや事業所の大人の〈感謝の言葉と励ましの言葉〉〈事業所の大人のサポート〉は、自分のしていることを認めてくれる大切な存在となっていた。親や教師以外の大人の存在は、中学生にとって自己を見つめる鏡の役目となることが分かった。大人の真剣な態度や大人の情緒的な関わりなどが、中学生を本気にさせていた。

（3）コアカテゴリ〔統合されていく自己〕

中学生は、「14歳の挑戦」のわずかな期間の体験の中でも、葛藤を抱き、それを乗り越えるというライフサイクルの縮図のようなものを体験していた。中学生は、【現実自己と理想自己】を内面に抱きながら生活していた。対人場面でのコミュニケーションの苦手さを強く自覚し、対人関係を円滑に築いていける自分になりたいと希望していることが語られた。職場体験が始まり、中学生は【自分を振り返る契機】に出会っていた。【自分を振り返る契機】とは、やりたくないことをしなければならぬ葛藤に出会ったり、自分にできるのか不安な気持ちや注意をされる不快な感情を感じたりして、これまでの自分の物事に対する考え方や適応の仕方を振り返ることを強いられることである。このような【自分を振り返る契機】と出会うことがこれまでの物事に対するスキーマを変容させていった。中学生のスキーマを変容させることに関連していたのは、職場体験中の〔様々な感情を体験する〕であった。職場体験を通して、仕事に対する大人の熱意や工夫、役割の遂行を間近で体験したことが、中学生に働くことの楽しい面を認識させたり自分にもできるという効力感を感じさせたりすると共に、社会には自分のできないことがたくさんあるという寛容さを獲得させていた。〔様々な感情を体験する〕は、今の自分にフィードバックし、自分というものを【統合されていく自己】へと向かって絶えず作り直す作業をしていた。

（4）ストーリーライン・中学生

中学生にとって、人間関係がうまく築けるかどうかは大きな問題の一つである。それを前提に日々学習や部活動、生徒会活動などの学校生活が成り立つ。今回の調査においても、人前で話すことや初めて会う人と人間関係を築くことが苦手であると《自分の欠点を認識》していた。そして、職業体験を目前にして働く大人のイメージから〈笑顔が大事〉〈コミュニケーション能力を身に付けたい〉と《なりたい自己》像を抱く。職業体験が始まると《葛藤を経験する》出来事に遭遇しそれらが【自己を振り返る契機】となる。自己を振り返り、何とか働くことに適応するために、中学生は〈大人をまねる〉という行為を積極的に行っていた。〈大人をまねる〉行為は、大人の行為の意味に気づき、耳が遠いお年寄りにはゆっくりはっきり伝えるなどの、心の通ったコミュニケーション行動へつながっていった。また、今の自分にできることと今の自分にはまだできないことを感じ取り、一人で仕事をこなす姿やいくつもの役割を遂行する姿を見て《大人のすごさを実感》していた。これらの体験から、中学生は、驚き・尊敬・優しさ・効力感・不完全さなどの〔様々な感情を体験〕していた。このように、感情の体験が体験をより豊かなものにして、子どもたちは自己を見つめ直す作業を行い、〈他者との信頼関係を築く〉〈他者の視点に立つ〉などのように、それまであまり意識されていなかったことに重みづけをし、個々の〔強みとな

る価値観を形成〕していく。そして最初の【現実自己と理想自己の認識】と〔強みとなる価値観を形成〕を照合し、再び〔統合されていく自己〕へと常に自己を作り変える作業を繰り返すプロセスを導き出すことができた。

キャリア意識形成とは、言い換えるならば自分の進む方向を指す羅針盤となる〔強みとなる価値観の形成〕のことであるとも言える。〔強みとなる価値観の形成〕には〔様々な感情を体験する〕としての【心がうごく】と【やる気を生むもの】、【受容されている実感】が重要な影響を与えているという仮説を生成することができた。この〔様々な感情を体験〕は、事業所や事業所に来た様々な世代の人との関わりから生起していた。言わば、自分を評価する関係ではない斜めの関係に存在する立場の人との関わりや言葉が、青年期へ向かっている中学生にとって自我をサポートしてくれることが示唆された。

Ⅳ. 総合考察

1. キャリア意識が形成される動き

小学生、中学生とも、キャリア意識形成への3つの動きを抽出することができた。

(1) 小学生

- ①自分の成長を振り返る活動が、感謝の気持ち・恩恵を享受する自分の気づき・感謝に対する返報性を喚起し、他者視点の獲得へ至る。
- ②役割の経験は、達成感や連帯感を喚起し、主体性の獲得へ至る。
- ③感情の体験によって新しいスキーマを獲得し、目標に向かって努力する〔物事に取り組む力〕へ結びつく。

(2) 中学生

- ①大人の姿をまねて学ぶことが、尊敬や有能感、感謝などの感情を喚起させ、強みとなる価値観の獲得へ至る。
- ②〔強みとなる価値観の形成〕後、自己にフィードバックし、自己を理解し自己を統合する動きがあった。
- ③自分の長所と共に自分の弱みや限界をある程度把握しながら自己を統合していく過程に、大人の情緒的なサポートが大きく影響していた。

(3) キャリア教育のあり方

活動を通して経験や知識を広げると同時に、どのような感情を体験することになり、その感情体験がどのような思考と行動の変化を喚起するのかをある程度大人が理解していることが大切である。大人が若者に伝えたい価値観をもっていなければ、知識だけを教えたり意味のない活動につながったりする恐れがある。本研究では、「2分の1成人式」の活動が恩恵を享受する自分を認識することへ拡張し、家族からの受容感が感謝の気持ちへ拡張し、感謝の気持ちが他者視点へ拡張していた。中学生は、「14歳の挑戦」での活動が年長者の背中を見て学ぶことへ拡張し、大人から働くことを学ぶ経験が従来の世代間継承というシステムへ拡張し、世代間継承が尊敬の気持ち

へと拡張していた。体験する感情も形成される価値観も目に見えるものではないからこそ、大人自身が若者に何を伝えたいのかを自分の心の中に持っていることが児童生徒の思考と行動の変化を温かく且つ鋭く評価できると考える。

(4) 生成された仮説

キャリア形成とは、自分の進む方向を指す羅針盤を見つけ、生涯を通して自分自身を支えていける自己を形成していくことである。

本研究では、小中学生が自分の強みとなる価値観を形成していく過程には、受容されている実感と心がうごく体験が大きく影響していた。このことを踏まえ、情緒的サポートを含めた感情の体験が、小中学生の主体性や肯定的自己理解と自己有用感の獲得などに影響を及ぼすという仮説を生成した。

(5) 今後の課題

本研究では、家庭や社会との連携を図ったイベント的なキャリア教育活動を枠組みに、小中学生にどのようなキャリア意識が形成されるのかをそのプロセスを質的に検討した。教科学習を通して自分の強みとなる価値が形成されるとすれば学習への無気力さは減ると考えられるが、教科学習においても「心が動く体験・経験を経ることで自分の強みとなる価値観が心の中に形成される」という仮説が成り立つのかは、今後の課題としたい。

研究の限界としては、インタビューに応えた児童生徒は、完全にランダムで選ばれた者ではなく、学校の判断により、ある程度インタビュー調査に耐えられると判断されたものから抽出されている。それゆえ、本研究の結果を早急に一般化することについては注意が必要であると考えられるし、2分の1成人式も14歳の挑戦も、ネガティブな印象をもった者のデータもまた、蓄積されていく必要があるだろう。

また、2分の1成人式については、死別や離別といった家族の多様な現実を踏まえた場合、安直に実施することへの危惧も指摘されている(内田, 2015)。こうした指摘を踏まえ、キャリア意識の形成の光と影、どちらの側面も踏まえたうえでキャリア意識を醸成していくための実践や研究についても、今後の課題である。

V. 引用文献

- ベネッセ教育情報サイト(2013)9割が満足!親子で感涙する「2分の1成人式」とは!?
- 中央教育審議会答申(1999)『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』,中央教育審議会
- 速見敏彦(2017),前向きな心の発達,児童心理,1034,13-19
- 泉井みずき・中澤潤(2010)非援助に対する返報一諸研究の概観と発達研究への展望一,千葉大学教育学部研究紀要,58,73-77.

木下康仁（2007）ライブ講義M—G T A実践的質的研究
法 修正版グラウンデッド・セオリーアプローチのす
べて，弘文堂

国立教育政策研究所，キャリア発達にかかわる諸能力の
育成に関する調査研究報告書—（2013）実業之日本社

宮田延実（2012）小学生の希望職業からみた職業的発達
の検討，キャリア教育研究，30，53-60.

文部科学省（2009）中学校職場体験ガイド

文部科学省（2007）子どもを守り育てる体制づくりのた
めの有識者会議まとめ（第1次）

村井康真（2012）小学生を対象とした海外のキャリア教
育の研究動向，筑波大学大学院学校教育学研究紀要，5，
39-57.

日本発達心理学会（2013）発達心理学事典，丸善出版

関文恭・吉田道雄・篠原しのぶ・吉山尚裕・三角恵美子
・三隅二不二（1999）働くことの意味に関する国際比
較研究，九州大学医療短期大学部紀要，26，1-10.

仙崎武（1998），職業教育及び進路指導に関する基礎的
研究，文部省委託調査研究

下村英雄（2009）キャリア教育の心理学，東海教育研究所

下村英雄（2011）若年者の自尊感情の実態と自尊感情等
に配慮したキャリアガイダンス，JILPT Discussion
Paper Serise 11-16.

建沼友子・白井裕史（2013）小・中・高等学校を見通し
たキャリア教育に関する研究

内田良（2015）教育という病 光文社新書

渡辺弥生（2011）子どもの「10歳の壁」とは何か？，
光文社新書

吉田裕典（2009）キャリア教育に置ける職場体験の意義，
東京大学大学院教育学研究科紀要，49，247-258.

（2017年8月29日受付）

（2017年10月4日受理）